

アグファ 第3回 工場長サミット

コロナ禍とその後を見据えた自社の取り組み



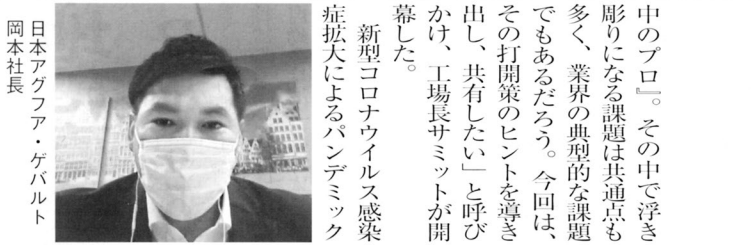
ファシリテーターの佐川印刷 佐川氏

アグファが提唱する「アズラ速乾印刷」というひとつの技術を共通の価値観とし、「工場の改善で印刷会社全体の革新を目指す」という同じ志を持つ印刷会社が集う「工場長サミット」が7月14日オンライン形式で開催され、10社の工場管理責任者らがパネラーとして参加した。3回目を迎えた今回のテーマは「コロナ禍とその後を見据えた自社の取り組みについて」。同会発起人でもある佐川印刷(愛媛県松山市)の佐川正純社長がファシリテーターをつとめ、10名のパネラーから、コロナ禍において各社が実践した経営改革や業務改善、またアフターコロナ時代に向けた取り組みの一端が発表された。

開会に先立ち、挨拶に立った日本アグファ・ゲバルト(株)の岡本勝弘社長は、「この『工場長サミット』は、先進的な取り組みで業界をリードする印刷会社にご参加いただき、直面する課題をともに解決していくことを趣旨として立ち上がった。コロナ禍で仕事が激減する中、業務を改善し、成果を出している印刷会社も多く存在する。今日は、そんな情報を共有し、自社に持ち帰って実践していきたい」と述べ、活発な議論と問題提起を促した。

現場の多能工化急ぐ

業界の共通課題浮き彫りに



日本アグファ・ゲバルト 岡本社長

「現場の多能工化」というひとつの技術を共通の価値観とし、「工場の改善で印刷会社全体の革新を目指す」という同じ志を持つ印刷会社が集う「工場長サミット」が7月14日オンライン形式で開催され、10社の工場管理責任者らがパネラーとして参加した。3回目を迎えた今回のテーマは「コロナ禍とその後を見据えた自社の取り組みについて」。同会発起人でもある佐川印刷(愛媛県松山市)の佐川正純社長がファシリテーターをつとめ、10名のパネラーから、コロナ禍において各社が実践した経営改革や業務改善、またアフターコロナ時代に向けた取り組みの一端が発表された。



オンラインで開かれた工場長サミット

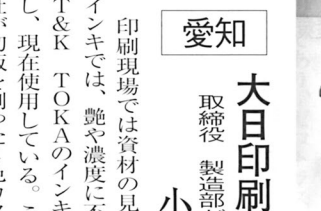
今回の工場長サミットでは、そのような環境を踏まえ、オフセット印刷工場の現場を統括する「プロ」が、コロナ禍とその後を見据えた自社の取り組みについて意見を交わした。

さらに、コロナ禍において情報伝達手法としてその優位性が再認識された「デジタル」という「敵」も印刷会社の仕事を浸食しつつある。今回の工場長サミットでは、そのような環境を踏まえ、オフセット印刷工場の現場を統括する「プロ」が、コロナ禍とその後を見据えた自社の取り組みについて意見を交わした。



佐川印刷 佐川氏

佐川印刷では、従来の商印から、堅調な出版・書籍に大きく舵を切り、現場の人員を中心とした営業活動に着手。一定の成果を上げた。一方で、工場の稼働率低下にもない、その時間を使って教育に注力。いわゆる現場の「多能工化」に取り組んだ。結果、工場の人員配置における汎用性が高まったことで、時差出勤でも機械の稼働率が落ちない体制を構築。この活動は現在も継続中である。



大日印刷(株) 取締役 製造部長 小林広明氏



東京 (株)藤和 製造部長 伊藤英隆氏

イベント自粛をはじめとする人流抑制の影響で当社が主力とする商業印刷は、昨年夏実績で前年比3割減まで落ち込んだ。非接触を強いる中で対面営業ができないことが大きく影響した。そこで、従来の商印から、堅調な出版・書籍に大きく舵を切り、現場の人員を中心とした営業活動に着手。一定の成果を上げた。一方で、工場の稼働率低下にもない、その時間を使って教育に注力。いわゆる現場の「多能工化」に取り組んだ。結果、工場の人員配置における汎用性が高まったことで、時差出勤でも機械の稼働率が落ちない体制を構築。この活動は現在も継続中である。



東京 (株)日新 工場長 井上聖司氏

コロナ禍で商印が出版に進出することは分かった。営業にもその危機感を浸透させた。当社は文字物・モノクロの会社だったが、12年前にカラー化。4年前にはUV機を導入してはいる。その中で、カラーマネージメントにおいて、「こうすれば、こういう色が出せる」という印刷会社が押しているカラーマネージメントを廃止した。色には好みがある。顧客のイメージを制作に伝える。印刷に忠実に反映させることで顧客満足度を高めた。「お客様が欲しい色を出せる」という印刷にこだわっている。アフターコロナに向けてということでもないが、濃度を高めた立派感のある印刷物への取り組みに力を入れている。インキを盛って出すところは出し、シャープな再現度で線と線の間は絞る。これを「マッチョな印刷」と呼んでいる。標準データの100%は何をやっても100%。それを120%に引き上げるのが印刷の仕事だ。当社は、そこにこだわること。カラーの仕事を増やしてきた。



福岡 (株)日新 工場長 井上聖司氏



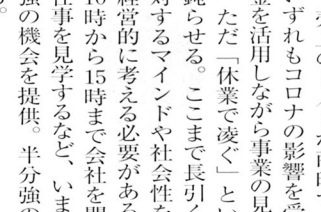
新潟 (株)吉田印刷所 代表取締役後継 吉田泰造氏

売上上の2/3が商印で、残りが製袋事業。いずれもコロナの影響を受け、雇用調整助成金を活用しながら事業の見直しを進めた。ただ「休業で長く」というのは仕事の勘を鈍らせる。こまめに長く、社員の労働に経営的に考える必要がある。そこで当社では10時から15時まで会社を開放し、違う部署の仕事を見学するなど、いままでもできなかった勉強の機会を提供。半分強の社員が参加している。



大阪 (株)高速オフセット 常務 赤尾一氏

コロナの影響で、新聞の受託印刷が削減。商業印刷は当初半分以下にまで落ち込み、雇用調整助成金を活用しながらの経営を強いられ、一方、既設のカッティングロボットを活用し、一方、既設のカッティングロボットをフル活用し、印刷は一切しない商材だが、ECサイトを通じて結構売れた。今年3月末の決算は減収増益を確保した。



東京 (株)境英印刷 工場長 山田高広氏



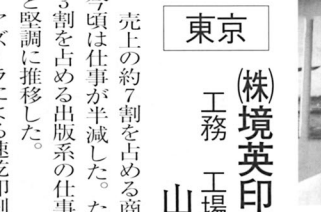
東京 (株)教文堂 印刷部 課長 水上勝一氏

売上比率は、地元百貨店グループで50%。一般で50%。イベント自粛の影響で、百貨店グループの売上が大きく落ち込んだが、その中で3つの取り組みを実践した。当社の従業員87名のうち、4割がWebグラフィックデザイナー。意図的にデジタルコンテンツからのアプローチを強化し、印刷物の波及受注を試みた。結果、デジタルコンテンツの受注に成功した大口の既存顧客から、前年を上回る印刷物の受注額を達成した事例もある。さらに、コロナの影響を直接受けにくい、官公庁、学校関係へのアプローチも強化し、成果を上げた。一方、社内には外注に頼っていた折工程を内製化し、同時に現場の多能工化に取り組んだ。当社では、後加工工程のほとんどが協力会社への外注だが、調査の結果、残念ながら30件の品質トラブル中、10件近くが外部委託先でのミスだった。これはコロナ禍でのコミュニケーション不足の影響もあると思う。今後は、協力会社とのコミュニケーションを密にしていかなければならないと感じている。



岡山 (株)コーセイカン 取締役 管理統轄 岩井馨氏

私は40年以上オフセット印刷に携わってきた。紙のコンテンツは絶対壊れないと信じている。透過光より、紙メディアのように反射光で物を見るときは、目に優しい。また、バッテリー等のエネルギーも必要としない。そういうものを大切にしながら、今後印刷に携わっていきたい。



東京 (株)教文堂 印刷部 課長 水上勝一氏



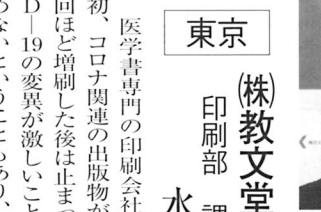
東京 (株)教文堂 印刷部 課長 水上勝一氏

医学書専門の印刷会社。コロナ感染拡大当初、コロナ関連の出版物が増えた。しかし、3割増の増産後は止まった。やはりCOVID-19の変異が激しいことや、まだ正体が掴めないというところもあり、結論的な書籍の出版をためらう風潮が見られた。しかし、これが落ち着いたと、医学関連の様々な書籍に必ずCOVID-19の項目が追加される。新聞はもちろん、改定、増刷という需要も見込める。当社では「アズラは水が絞れる」という武器を手に入れた。「アズラは水が絞れる」、スプリマはインキ使用量を減らせる。この両方をきっちり実践すればパウダレスは難しくもない。さらに、抗ウイルススプレーによる新たな展開として、紙フォルダや名刺の商品化に向けて準備を進めている。ニスを利用することで再生紙にできることからSDGsへの貢献にも繋がる。



岡山 (株)コーセイカン 取締役 管理統轄 岩井馨氏

私は40年以上オフセット印刷に携わってきた。紙のコンテンツは絶対壊れないと信じている。透過光より、紙メディアのように反射光で物を見るときは、目に優しい。また、バッテリー等のエネルギーも必要としない。そういうものを大切にしながら、今後印刷に携わっていきたい。



東京 (株)教文堂 印刷部 課長 水上勝一氏



東京 (株)教文堂 印刷部 課長 水上勝一氏

私は40年以上オフセット印刷に携わってきた。紙のコンテンツは絶対壊れないと信じている。透過光より、紙メディアのように反射光で物を見るときは、目に優しい。また、バッテリー等のエネルギーも必要としない。そういうものを大切にしながら、今後印刷に携わっていきたい。